

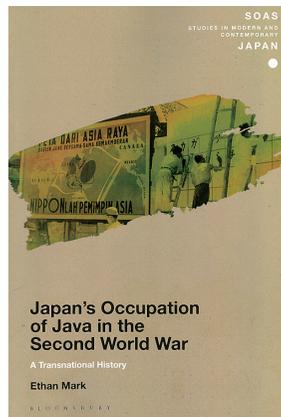
イーサン・マーク

『第二次世界大戦における日本のジャワ占領
—— 国境横断的歴史』Ethan Mark, *Japan's Occupation of Java in the Second World War: A Transnational History*

ジョン・ヘネシー

イーサン・マークのこの大著は、日本によるジャワ占領を日本が経験した一事例と捉えるが、実のところ本書は戦時期大東亜思想についての本であり、そういう書物として、アジア太平洋戦争の思想的支えを知りたいと思う者には、また東南アジア以外の文脈でも、きわめて興味深い一書である。端的に言うと、著者が目指したのは、のちに日本軍の武運が傾くにつれ、急速にそして急激に信用を失墜したこのイデオロギーが、これほど多くの多様な集団にいかにしてこれほどの訴求力を持ち得たのかという疑問に答えることである。著者の賢察によれば、日本が唱えた理想、反(西洋)植民地主義、汎アジア同胞という修辭と、シニカルで、明確に植民地主義的で、搾取的、狂信的排外主義的な行動との間に極端な隔たりがあつたがゆえに、戦後の不十分で単純化しすぎ

た説明へとつながつたという。レトリックと実態のあいだのこの著しい隔たりを日本の戦時国家指導者によるシニカルな共同謀議のせいにするのは、日本人にすれば極めて安易なことと判明した一方で、アジア諸国のナシヨナリストたちはしばしばこの隔たりを、日本人の表向きは「邪悪な」性格を用いて説明してきた。本書の末尾で著者が雄弁に説くのは、そのいずれもが説明としてはお粗末で、大東亜の理想が多くの日本人とアジア人の双方にまさに心から訴えるものだったことをぼやかしてしまふものであること、また、一九九〇年代以後、かつての「大東亜」的言説が、大日本帝国の版図だった地域で共有される「アジア的価値観」を本質主義的に支持するという形をとって甦っているのを目の当たりにするとき、このことを正確に理解するのが重要であるという



Bloomsbury, 2018

ことだ。

「国境横断的歴史」と銘打つ本書は、日本とジャワというアジアの二つの社会の接点について、双方の相手方への姿勢をほぼ同じ比重で扱いつつ、両者の内部に存在する多様性をはつきりと描き出した。すばらしい成果である。この点ですぐ連想するのは、アメリカの日本占領を描いたジョン・ダワーの名著『敗北を抱きしめて』（一九九九）だ。分析力の点でも、この二冊はよく似ている。

占領前夜の二つの社会それぞれの状態について、二章にわたる簡潔だが豊かな描写のあと、三年半の日本のジャワ占領期間中に双方の考え方と政策に起きた地殻変動的な変化を、おおよそ時系列に従い、テーマに沿った章がつづく。日本軍の到着とオランダのあまりにもあつけない敗退に始まり、日本とジャワ双方の手放しの期待感がいやが上にも高まったこの「ハネムーン期間」が時系列的に描かれる。ジャワ人にとって、三世紀にわたり支配したヨーロッパ人君主を、近代的な非西洋の国がほんの数日で打ち負かしたことは電撃的な感動だった。多くの人は、日本が模範となり、独立インドネシアに向けた能動的指針を示してくれるだろうと期待した。一方、中国で手強い抵抗に会い、戦線膠着に陥った経験をたつぷり味わった多くの日本軍人にとって、この温かい歓迎は、ジャワの熱帯性気候や住民の人種的、文化的親和性も相

まって、ジャワ人同様、未来に無限の可能性を夢見させてくれるものだった。

著者が正しくも指摘するように、双方が抱いた大きな期待はけつして実ることがなかった。だが日本の占領軍が到着したとき、持ち合わせていた大量の善意を惜しげもなく注ぎこんだそのスピード感は、それでも並外れている。侵略のとき掲げられた日章旗と並んでインドネシア国旗が翻ったが、一月後には降ろされて、国歌も禁止された。日本兵は地元民を見下し、非礼に対して日本軍ではふつうに行なわれていたビンタの習慣は地元民の神経を逆撫でした。他人の頭を触ることは厳格なタブーだったからだ。占領が進むにつれ、インドネシア人が当初抱いた希望はくりかえし、ほとんど組織的に打ち砕かれた。インドネシアのナシヨナリストたちは憲兵隊の暴力的な尋問に遭い、独立の約束は事実上戦争が終わるまで保留され、日本の戦時需要のせいで、すでに悲惨な状態にあつた労働者や農民の生活はいよいよ逼迫した。そして事態はさらに悪くなるばかりだった。「ジャワの労働者階級の多くは占領期後半を靄のかかった悪夢のように記憶していた。食べ物を探めて幽鬼のようにさまよい、米の代用にキャッサバ芋を食べ、ろくに着るものもなく外出もままならない。演習や強制労働が嫌だった」(p. 265)。しかし（このことは別の箇所にも記されているが）著者にそもそもこんな苦しみを記録するつもりはなく、当初

はあれほど期待に満ちていた占領がかくも惨めな失敗に終わったのは何故かという、切迫した疑問に答えるのが目的だった。だが、もつと重要なのは、何故あれほど多くの日本人が、そしてスカルノのようなナシヨナリスト・リーダーたちすらもが、無残な結果を見るまで「大アジア」の夢にすがりつづけたのかということだ。

著者の結論のうち最も重要なものの一つは、双方の陣営に存在した異質な活動当事者によってこの占領の性格の多くを説明できることである。占領期間をつうじ、各段階で登場するさまざまに印象的な個人や集団の紹介につづき、それぞれの異なる世界観や関心がいかに交差し、時には歩み寄っても、たいていは矛盾対立するようになるか、そしてそのことが占領の失敗の多くを説明することが、巧みに語られる。とりわけ「大アジア主義」という言葉は、異なる人々にとつて、まったく異なる意味を持つ。このあと叙述は「軍宣伝部隊」と呼ばれる集団、つまり日本の戦時思想を売りこみ、ジャワの人々を心身ともに掌握するために、さまざまな文化芸術分野から集められた日本の「文化人」の集団に移る。彼らの多くは日本の汎アジア言説の確信犯的信奉者であり、インドネシア人を「同胞」と見て、その独立達成を助けたいと思っていた。しかし民間人である宣伝部隊は、保守的な軍部からはまるで信用されていなかった。宣伝部隊が当初インドネシアのこのナシヨナリズムそのものの取り込みを図った直後に、現地ナシヨナ

リストたちの志がシニカルに打ち消されたことで、宣伝部隊は難しい立場に立たされ、個人的に大きな落胆を味わったが、それでも彼らは公にこの政策転換を進めるのに全力を尽くした。なぜなら、いかにインドネシア人を肯定的に見ていようが、彼らはずまるところ、日本とその国益の優位を信じていたからである。このあと著者は軍と宣伝部隊の腑分けをつづけ、個々人のさまざまな背景や思想に踏み込むが、そこから伝わるのはますます矛盾したメッセージである。

ジャワ側には、峻別すべきさまざまな集団があつた——保守派オランダ統治時代の政府に協力的なエリートと現地人役人、対抗戦略を唱える新参エリート（とくにオランダ人の下での漸次的変革を望む者や「非協力者」）、若く過激なナシヨナリスト、ジャワ人労働者階級、華僑（多くがオランダ人に密着して巨万の富をなしたがゆえに、ジャワ人の大半から嫌われている）。さまざまな資料の広範な一次調査をつうじて著者がとくに選び出したのは、自己利益と純粋な理想主義の混合物で、これが各時点で上記すべての集団を日本との協力に誘いこんだ。ここで説得力をもって描かれるのが「大アジア主義」である。この思想に惹かれたジャワ人は、多くの日本人がそうであつたように西洋の帝国主義を憎み、それとは異なる方法で近代を目指す集団的方法を模索した。彼らが夢見たのは、アジアの伝統文化に根ざし、彼らにとつて西洋近代の本

質と考える資本主義と共産主義双方の過剰を避ける道であった。中には心から日本を賛美する者もいたが、その表現はより自律的な行動を隠すためにも用いられた。たとえば「三亜運動」（「アジアの指導者日本」「アジアの光日本」「アジアの母体日本」）はこれまで日本の尊大さの現れとみなされてきたが、これについて著者は別の説明を試みる。この運動は、日本の保護下以外では禁止されてきたナシヨナリストの共同体構築プログラムのための合法的な場を求めて、インドネシア人が着想し、その多くを運営したのではないかというのである。日本軍の一部から疑われて、一見超愛国的なこの運動が終焉を迎えたのち、ナシヨナリストの英雄スカルノは占領を隠れ蓑に新しい国民運動を構築しようとした。このときスカルノはシニシズムと純情、つまりインドネシアのナシヨナリズムと「大アジア主義」信奉の双方に彩られた危険な二枚舌を弄していた。スカルノのようなエリート・ナシヨナリストは、労働者階級ほどには直接の苦しみがなかったゆえに、日本軍への協力を続けるのはより簡単だった。占領者と被占領者の双方に対し、本質主義的アプローチを一念に避ける著者の姿勢こそ、本書の主要な成果である。それによつて、あまりに多くの歴史書に特徴的だった「邪悪な日本人」と「非力なジャワ人」というステロタイプを超越できたからだ。

題名に反して本書は日本のジャワ占領についての包括的な歴史

書ではない。ヨーロッパ中心の歴史書をもう一冊書くのではなく、日本人とジャワ人に焦点を絞った著者の姿勢は正しいが、現地のオランダ人がたどった運命については、オランダ人慰安婦を除いて、驚くほど無関心だ。日本人によるオランダ人捕虜の扱いは、「大アジア主義」、ジャワ人、日本の逆説的な反帝国主義的帝国主義に対する日本人の考え方に大きく光を当てるのではなからうか。著者はオランダ人レオ・ヤンセンの直接的な占領観察を主要な情報源にしているが、この人物のことは同様に何も語られていない。読者としては、このような、おそらくは敵対的だったであろう環境でヤンセンがどのように生き延び、働くことができたのか知りたいと思う。日本の占領の終焉も語られず、降伏直前の描写で終わっている。占領期をつうじて活動した多様な人物や集団が日本の敗北とインドネシアの独立宣言にどう反応したかについての分析は、本書の主題ときわめて関わりの深い問題であるはずだ。著者の今後の作品でぜひこういう問題を取りあげてもらいたい。このように省かれた話題はあるにせよ、日本の汎アジア主義と、二つの社会の多様な個人と集団に起きたさまざまな出来事の研究として、本書はすばらしい出来ばえであり、今後長いあいだ、この分野で卓越した地位を占める著作であることに変わりはない。

（翻訳・朝倉和子（SWET所屬））